

HASHIMOTO NATSUO

橋本 夏夫

略歴

1953 東京生まれ (埼玉県在住)

1983 東京藝術大学大学院彫刻専攻修了

個展 (抜粋)

ギャラリーTERASHITA (東京) 2009 2006 2004.

鎌倉画廊 (東京) 1981 1983 1987 1989 1991 1993

石屋町ギャラリー個展 (京都) 1991 1994

アートサイト個展 (福井) 1990

グループ展(抜粋)

七曜7人展 20周年記念展 天王洲セントラルタワーアートホール 2022

自宅から美術館へ 田中恒子コレクション展 和歌山近代美術館 2015

kunst 09 zurich 15th international contemporary art fair Zurich in Switzerland 2009

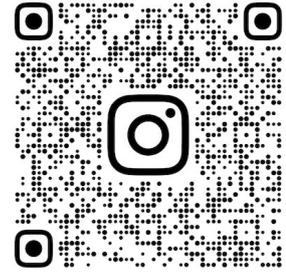
通火した形 展 galleryAXIS6917(福井) 2009

ART in CASO 湾岸通りギャラリーCASO(大阪)2005

現代美術への視点「形象のはざまに」国立近代美術館 1992

現代彫刻の歩み-III「1970年代以降の表現」神奈川県民ホールギャラリー 1990

平行芸術展 小原流会館 (東京) 1987



@NATSUOHA

若いころ、画廊という白い空間を丸っこい形や箱型のようなもので「場を占める」ことに夢中になっていた。箱型の作品を展開する過程で中に空気を閉じ込めた「T字型」の形が生まれた。この構造がアルミニウムという素材の彫刻的な自立性を引き出せるように思えた。やがて「T字型」の突起を削り取り平板になったが突起の痕跡は素材の自立性を失うことはなくて平板だけ彫刻的な作品が生まれた。今は長く続いた中空の存在感から解放され「開かれた中性的な大きさや風を孕むような形」の柔らかさを楽しんでいる。そういえば子どものころ、空に浮かぶ雲の中を浮遊したり水蒸気の湿り気を感じたり、空の音を聞いていた。

大江健三郎の小説の中で谷間の村に住む人々には森の中に自分の木があり、森の中をさまよう自分の木のそばで老人になった自分に出会ってしまうという一節があった。たしか老人になった自分はかつての子どもだった自分に「どう生きたか」と問われるというものだったように記憶している。久しぶりの発表だから若いころの作品も展示してみようと思った。作品の側から見ると老人になった自分に出会ってしまったようなものである。そして問われているように聞こえた。

OHSUMI HIDEO

大隅 秀雄

略歴

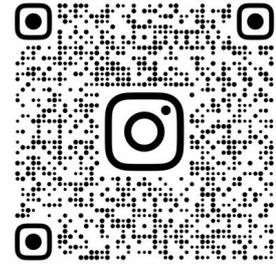
1955 仙台生まれ（神奈川県在住）
1982 東京藝術大学大学院鍛金専攻修了

個展（抜粋）

いりや画廊 2024 2022 2018
方圓雕塑（台湾：台中） 2017
玉川高島屋S.Cルーフギャラリー（東京） 2007
天王洲セントラルタワー・アートホール（東京） 2004

グループ展（抜粋）

Beyond Medium 論功夫（THE 201 ART 順天建築.文化.藝術中心：台湾） 2022
七曜7人展 2023 2022 2021 2020 2019 2018 2017 2016 2015
未景展（京都：泉涌寺） 2022 2021 2020 2019
In Pursuit of Beauty 2019 - Tokyo + L.A.（Los Angeles） 2019
嬉型鋼 高雄國際鋼雕藝術節（台湾：高雄） 2016
UBE ビエンナーレ（山口：宇部） 2011 2007 2001
倉敷まちかどの彫刻展 2003
ヘンリー・ムア大賞展 1985 1983 1981



@OHSUMIHIDEO

小学生の頃、叔父が羽田空港の近くに住んでいたの、よく飛行機を見につれていってもらった。また東海道線や京浜東北線などが通る踏切にも近かったの、手動の遮断機の上げ下げが面白くてよく通い、踏切番のおじさんと仲よくなり沢山の列車の通過を見ていた。そんなこともあったのか動くものに興味を持ちはじめ、車やバイクのデザインをしてみたいと思うようになった。その後、父の仕事の関係で自然豊かな箱根の山で暮らしていた中学生の時、学校のすぐ前に箱根彫刻の森美術館が開館して遊びに行った。初めて見る大きな野外彫刻がとても刺激的だった。どうもこの経験が刷り込みとなったようで、デザインの世界を志して学んでいたが、野外彫刻の道へ進んでいくことになった。運よく大学院在学中に第2回ヘンリー・ムア大賞展に入選、彫刻の森美術館に大きな作品を展示。以後「ちょっと待って」という思いを込め、風で動く作品を制作している。